

ピンクリボンNEWS

2023年度

冬号

Vol.12 No.4

発行人 認定NPO法人 J.POSH

編集 ピンクリボンNEWS 編集委員会

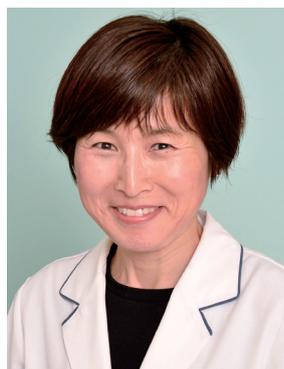
発行所 J.POSH事務局〒538-0043 大阪市鶴見区今津南2丁目6番3号 TEL.06-6962-5071


J.POSH
日本乳がんピンクリボン運動

TOPICS

妊娠授乳期の 乳がんについて

～ママのブレストアウェアネス～



がん研究会有明病院
乳腺センター
乳腺外科

片岡 明美

1. はじめに

我が国の乳がん患者数は近年急増していますが、その原因に晩婚化と少子化という女性のライフスタイルの変化が考えられています。生殖医療技術の進歩もあり、40歳前後での高齢初産も増えていますので、今後は妊娠中や授乳期に乳がん治療を受ける女性の増加が懸念されています。

2. 妊娠関連乳癌(PABC)とは

妊娠中や授乳期に診断された乳がんのことを妊娠関連乳癌(PABC)と言い、診療現場では通常の乳がんとは区別して対応しています。PABCは検診の対象年齢の40歳以下に多く、大きく緊満した乳房のために発見が遅れ、進行していることが多いために、治療しにくいという特徴があります。

また、PABCの中でも、妊娠中に診断された乳がん(PBC)と、産後1年以内または授乳期に診断された乳がん(LBC)に分けて検査や治療を行います。

2. PBCの診断と治療

胎児への影響を考え、薬剤使用や放射線被ばくを極力控えつつも、母体の安全(=がんの進行による生命予後のリスク)を優先します。がんの進行が急速でなければ、先天奇形のリスクの低くなる妊娠中期になるのを待って全身麻酔下での手術を行い、出産後に薬物療法と放射線治療を行います。がんの進行が急なときには、胎児の状況をみながら抗がん剤治療を開始し、計画分娩を行い、産後にも治療を追加します。妊娠中のがん治療は周産期管理も同時にできる専門施設で行います。

3. LBCの特徴

出産後の女性の乳房では、授乳から断乳へと乳腺組織の退縮過程でおこる乳腺組織内の微小環境の変化(involution)が起こり、その環境下ではがん細胞の転移や浸潤が促進されるため、LBCはPBCよりも、進行やすいと言われています。

がん研究会有明病院乳腺センターでのPABCの状況をみてみますと、1946年から2018年に乳がん手術を受けた約3万人の女性のうち、PABCは175人(約0.6%)、うちLBCは126人、PBCは49人でした。背景因子を比較すると、LBCはPBCに比べてリンパ節転移が多く化学療法を受ける

割合が高く、再発や乳がん死亡が多いことが分かりました。ただし、経年的にみると、2005年以降に治療を受けたLBCの女性は、それ以前に治療を受けた方たちよりも早期発見された傾向にあり、予後も有意に改善していました。女性たちの意識向上と集学的治療の効果と思われます。

4. 乳がん発症と妊娠・授乳の関係

最近、京都大学の小川先生らの研究で興味深いことが報告されました(Nature 620, 607-614)。女性の乳腺細胞は加齢によって遺伝子変異が蓄積するものの、出産・授乳を経験するとその遺伝子変異がリセットされ、閉経すると変異の加速度も落ちるといことです。これは、出産授乳の経験の少ない女性や40歳代後半の

女性に乳がんが多いという説明になります。また、妊娠中はエストロゲンというホルモンにより乳腺細胞が増殖していますが、授乳が終了するとそのホルモン刺激がなくなり遺伝子変異の多い乳腺細胞は急速に脱落していきます。そしてそれまで休眠していた幹(かん)細胞(さいぼう)から新しく乳腺細胞が増殖し、乳腺組織が再構築されていきます。PBCはこのエストロゲンに依存した状態で存在していますから、産後急速にエストロゲンがなくなることで、がん細胞そのものも退縮する可能性があります。産後から授乳期に診断されるLBCは、そのエストロゲンへの依存性がなく、リセットされずに生き延びていたがんなのでより悪性度が高いがんであることの説明がつかます(図)。

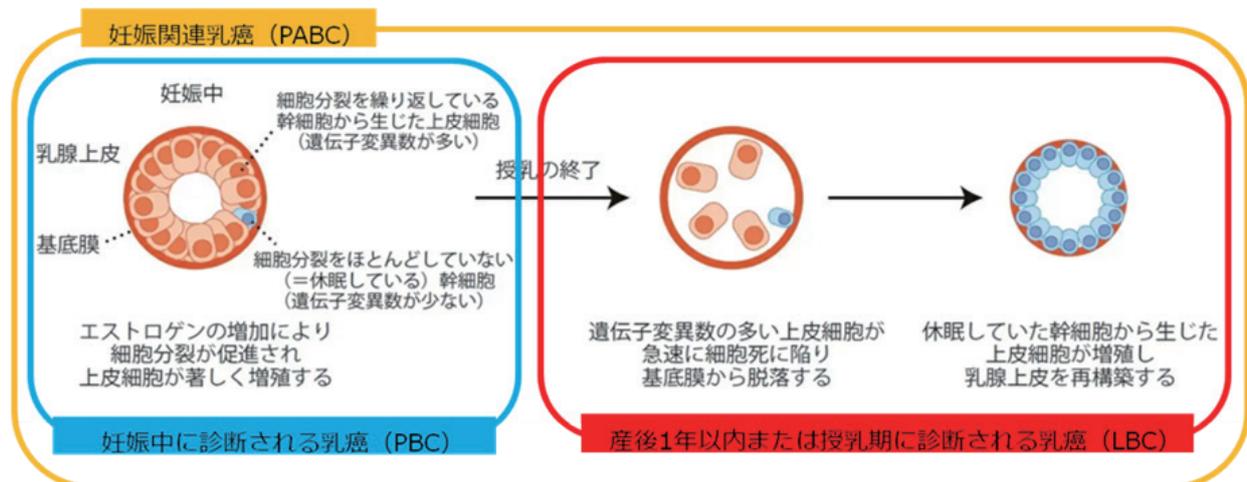


図. 出産授乳後の乳腺の再構築とPABC(東京医科歯科大学ホームページ <https://www.tmd.ac.jp/press-release/20230727-1/> より改変引用)

5. ママのプレストアウェアネス

これまで、PABCは頻度が少ないため、診療現場では特殊ケースとして個別の対応に苦慮してきました。女性にとっても妊娠、授乳期という通常とは異なる心理・身体的状態でがん治療を受けることは並大抵のものではないと思います。

PABCは治りにくい条件下にはあるとはいえ、薬物療法の進歩により治療成績は向上してきています。わが国に限らず、女性の初産年齢の高齢化と少子化は世界共

通の傾向であり、誰でも乳がんのリスクが高くなっています。妊娠・授乳期という特殊時期であっても、早期発見ができて適切な治療を受ければ、母子ともに健やかに過ごせる可能性が高くなります。いつもと胸の形や張り感が違う、授乳後に硬いしこりが残る、母乳に血が混じる、赤ちゃんが急に母乳を飲まなくなったなどは、乳がん発見のきっかけになる症状です。皆さんもどうぞ周りのママたちにも「プレストアウェアネス」のお声掛けをお願いいたします。

ミドリ安全 「安全のインフラを作る会社」

働く女性を応援する安全 衛生保護具ブランド展開

ミドリ安全株式会社(東京都渋谷区)は、現相談役の松村元子氏が1952年に『1足の安全靴(草履)を製造した』のを原点に、安全靴はもとよりワーキングウェア、ヘルメット、グローブ等の安全衛生保護具といった『安全と安心』をキーワードとした幅広い商品を開発。商品は全国の営業拠点と、インターネットを通じた直販体制により展開しています。

「安全のインフラを作る会社」を標ぼうする同社の社是は『安全・健康・快適職場への奉仕』。対象商品を第1次産業から第2次、第3次産業へとフィールドを拡大。安全靴、オフィスユニフォーム・ワーキングウェア、安全衛生保護具、ヘルメット、空気清浄機・エアフィルタ等の環境改善機器、電気設備保守管理機器、医療機器・救急用品・浮遊菌サンプラーなど、様々なジャンルの商品を開発し、取り扱っています。

同社がJ.POSHのオフィシャルサポーターに登録したのは2016年春。社内で『働く女性応援プロジェクト』が立ち上がり、女性が安全で快適に働ける環境づくりに貢



同社の原点である『一足の安全草履』



渋谷区広尾の本社屋

献したいと、社会貢献活動を模索しているところでした。その際、認知度の高いピンクリボン活動に注目し、「目指す方向が同じ。J.POSHと共に乳がん啓発活動を推進したい」と登録されました。登録と同時に、対象商品の女性用保護具の売上金額の一部をJ.POSHにご寄付頂いています。

対象商品売上の一部 J.POSHに寄付継続

女性向けの商品開発を進めるなかで、23年秋からは女性でも使い易い安全保護具のブランド『Midori WomenGear Jams!』(ミドリ安全の高機能でスタイリッシュな女性のためのギア)を本格展開しています。今年9月には、カタログサイトをリニューアル。多岐にわたる女性向け商品をラインナップされました。



女性向けのブランド商品

National Breast Cancer Awareness Month

2023年 ピンクリボン運動

各地の啓発活動ご紹介



ピンクリボン in SAPPORO
2023 9月24日(日) 札幌
駅前通地下歩行空間(チカ
ホ)北3条交差点広場にて

夜は札幌テレビ塔ライトアップを行い、今年もまた、乳がん検診の大切さを多くの方にお伝えし、ピンクリボンを考える一日となりました。

ステージイベントでは北海道日本ハムファイターズOB谷口雄也さんのトークショーをはじめ、昨年も好評だった藤女子大学マンドリンクラブやハワイアンユニット石川優美&ポノラニによる演奏、乳がんミニ講演を行いました。



ピンクリボンinSAPPORO代表で東札幌病院ブレストケアセンター長の大村東生先生が講師を務め乳がんの最新情報をテーマとしたミニトークを行いました。

ピンクリボン啓発ブースでは活動パネルの展示やパンフレットを配架し、乳がんの触診模型を体験していただきました。また学生ボランティアにお手伝いをいただきながら通行人1,000名以上に啓発リーフレットを配布しました。



National Breast Cancer Awareness Month



9月23日・24日開催の「やまがた健康フェア2023」でJ.POSHのテッシュを1000個配布
やまがたピンクリボン運動実行委員会

4月にオープンした「ららぽーと門真」のイベント広場で、10月7日に、大阪府、門真市とJ.POSHのオフィシャルサポーターのGUNZEさん、明治安田生命さんなどのコラボでピンクリボンと健康イベントが開催されました。



大阪府のもずやんと門真市のガラスケ、J.POSHの啓発パネルと共にポーズ。後ろのGUNZEさんのブースでは数名の方が触診モデルを体験中



大阪関西万博のキャラクター「ミャクミャク」も登場し、イベントを盛り上げていました。



患者と医療者のコミュニケーションを高めるワークショップ Vol.12
乳がんホルモン療法
治療期間のキヤロギを考える

日時 2023年10月21日(土) 14:00~16:30 (予定)
会場 乳がん患者 2名 (男性1名、女性1名)は必須参加
開催費 無料 (会場費は別途) (1名あたり100円) (会場費は別途)
会場 千葉市保健福祉センター3階 京ランタイムカフェ (千葉市保健福祉センター3階)
参加費 参加費無料 一般100円
申し込み先 info@ivy-chiba.org 申し込み締め切り10月15日
お問い合わせ 043-222-1111 (受付時間: 平日10:00~17:00)

主催 乳がん患者 2名 (男性1名、女性1名)は必須参加
共催 千葉市保健福祉センター3階 京ランタイムカフェ (千葉市保健福祉センター3階)
協賛 千葉市保健福祉センター3階 京ランタイムカフェ (千葉市保健福祉センター3階)

主催 アイビー千葉 (乳がん患者の会) URL: https://ivy-chiba.org TEL: 090-5779-1234
e-mail: info@ivy-chiba.org 会場: 京ランタイムカフェ (千葉市保健福祉センター3階)

オンラインと対面のハイブリッドで開催された「患者と医療者のコミュニケーションを考えるワークショップ」

乳がん体験者の会「アイビー千葉」は昨年設立40周年を迎えられました。

アイビー千葉(乳がん体験者の会)設立40周年記念対談
40年のヒストリー
未来へのストーリー
10周年記念乳がん体験者手記完成しました

11月19日(日) 13時~15時 参加費無料

会場 京ランタイムカフェ (千葉市保健福祉センター3階)
開催費 参加費無料 (会場費は別途) (1名あたり100円)
申し込み先 info@ivy-chiba.org 申し込み締め切り10月15日

主催 アイビー千葉 (乳がん患者の会) URL: https://ivy-chiba.org TEL: 090-5779-1234
e-mail: info@ivy-chiba.org 会場: 京ランタイムカフェ (千葉市保健福祉センター3階)

National Breast Cancer Awareness Month

認定NPO法人Company de Company ピンクリボンよこはま 各所でブース出展



11月3日 鎌倉女子大学の学園祭にてピンクリボンブースを出展 この日はマンモグラフィ検診車の展示・見学も行われたようです。



12月6日 ピンクリボンレディースバドミントン大会(ひらつかサンアリーナ)参加者は何かピンク色の物を身につけています。



「ピンクリボンオンラインウォーク in 埼玉」へのエントリー者を含め約400名が参加しました。
主催：国際ロータリ第2770地区第12グループ



4月22日 J.Dリーグのさいたまラウンドで地元開催に伴いピンクリボン運動ブースを設けて啓発活動を実施しました。

事務局からのお知らせ

J.M.Sを実施いたしました

2023年のJ.M.Sのアンケート結果を同封しております。やっとコロナ禍の峠も超えて参加医療機関様も2019年のレベルに近づく施設415件となりました。ご参加いただきました医療機関の皆様には休日にもかかわらず実施いただき誠にありがとうございました。

今年のアンケートでは、答えにくかったJ.M.Sを「知っていた」or「知らない」の質問に変えました結果、受診された方々の41.3%が知って参加いただいていることが解りました。一方57.1%の受診者が知らずに受診されており、医療機関の皆様の広報

活動、受診予約時の案内等の結果だということが解りました。改めて御礼申し上げます。

「家族で湯ったりキャンペーン」の抽選がおわりました

2023年度の「家族で湯ったりキャンペーン」の抽選を行い、23施設へ65名のご家族をご招待することになりました。

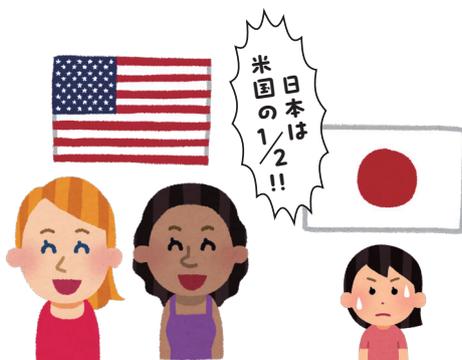
キャンペーン企画にご賛同いただいた温泉ネットワークの皆様に御礼申し上げます。



ピンクリボンNEWSあとがき

毎年10月は『ピンクリボン月間』。この時期には世界中で乳がん啓発活動が展開されており、日本でも医療機関、地方公共団体、乳がん患者会、NPOなどのさまざまな団体や個人が乳がん啓発活動を繰り返しています。

ところで、アメリカ始め主要国との国際比較でよく指摘されるのが我が国の乳がん検診の受診率の低さ。厚労省の資料(2018年度)によれば、50歳～69歳女性の受診率トップはアメリカで80.8%、次いでイギリス75.9%、オランダ・ニュージーランドそれぞれ72.2%などとなっていて、日本は41.0%。アメリカの半分という実態です。内閣府の「検診を受けない理由」調査によれば、多いのは「受ける時間がない」、「費用がかかり経済的負担大」、「がんと分かるのが怖い」、「健康に自信があり必要性感じ



ず」など。このほか「いつでも受診できる」、「検査時の苦痛が不安」、「受ける場所が不便」、「受けても見落としがあるのでは」などの理由も見受けられます。国立がん研究センターによれば、わが国の乳がんによる死亡

者数は1980年に4141人だったものが2017年には14285人と年々増え続けています。

私たちJ.POSHは『受けよう乳がん検査。乳がん早期発見で笑顔の暮らし』を合言葉に活動を展開していますが、受ける、受けない、は結局本人次第。「本人がその気にならないことには…」と、いつもそこに立ち返ってしまうのです。もちろん、受診の動機付けのための間口拡大に向けて、学校教育での乳がん教育の必要性、乳がん検診を一般健康診断項目へ”格上げを”などの活動は続けていきますが…(I.T)